

季 刊

生 活

特 別 号



Quarterly: SEIKATSU SP

Issue: Chronicle

生活工房
Lifestyle Design Center

ク ロ ニ ク ル

2020

S・P・1

展覧会

『世田谷クロニクル1936-83』は、
昭和の世田谷を映した
84巻の8ミリフィルム（記録）と
12人のフィルム提供者の
語り（記憶）を手がかりに、
令和という時代を歩みはじめた
私たちの“現在地”を照らし出す
試みとして開催しました。

季刊生活特別号では、
市井の人々が残した8ミリフィルムと
提供者のコメントのほか、
関係者へのインタビューや
コラムなどをおして、
その試みの一片を紹介します。

もくじ Contents

大特集 「世田谷クロニクル1936-83」

Cover Story Setagaya Chronicle 1936-83

- 04 インタビュー 松本篤（本展企画制作者、remo）
- 06 コラム 「記録」というトリガー、「記憶」という謎
- 08 世田谷クロニクル ポストムービー
- 09 スペシャル付録 「時の亀」
- 11 トークイベント 「思い出を食べる」に寄せて
- 15 展覧会情報
- 16 生活工房のご案内 Access Guide

cover photo: Longing for Oshima, June 6, Showa 11

大 特 集

世 田 谷 ク ロ ニ ク ル

1936-83

Cover Story
Setagaya Chronicle
1936-83



穴アーカイブ:an-archive 世田谷クロニクル1936-83

3.14 (sat) ~ 4.5 (sun) 10:00 ~ 18:00 (金曜のみ20:00まで)

入場無料 月曜休み

会場: ワークショップルームA・B、生活工房ギャラリー

※新型コロナウイルス感染症の影響により、展覧会開催期間は3月29日まで、関連イベントはすべて中止としました。

企画制作: remo [NPO法人記録と表現とメディアのための組織]

後援: 世田谷区、世田谷区教育委員会

イラスト: ナガノチサト

広報物デザイン&会場グラフィック: カラマリ・インク

会場設計: RUI Architects

施工: 吉田尚弘

調査: 松本篤、八木寛之、成田海波、ブルサコワありな、水野雄太
映像編集: 井田遥



展覧会の
記録映像

An-archive Setagaya Chronicle 1936-83

Admission Free Closed on Mondays

Venue: Workshop Room A・B, Seikatsu-Kobo Gallery

An-archive is a project that archives and shows 8 mm films found in Setagaya homes. This exhibition recreates life in Setagaya during the Showa period through the 84 films which have been collected and the stories of the people.

松本篤（「世田谷クロニクル1936-83」展企画者）

「世田谷クロニクル1936-83」展の企画者のひとりであり、
2015年にスタートした「穴アーカイブ」の
中軸を担う松本篤さん（remo）に、
これまでの活動やこの展覧会について話を伺いました。

text: Katsuhiko Sugimoto
illustration: Chisato Nagano photo: Daisaku OOZU

——「穴アーカイブ」は、個人宅に眠る8ミリフィルムの映像をデジタル化し、鑑賞会やウェブなどを通じて一般にも公開してきました。改めて、今回の展覧会までの「穴アーカイブ」の流れを教えてください。

活動がはじまって5年目を迎える「穴アーカイブ」は、これまでに4つのステップを踏んできました。最初の2～3年は、映像の「収集」と「公開」に集中してきました。たとえば、8ミリフィルムの多くは、映写機が故障したり、フィルムが劣化したりするなど、個人宅に眠

ったままの状態です。しかし、そこにはかつての世田谷の生活風景が刻まれています。そこで、映写機やスクリーンをご自宅に持ち込んだり、生活工房に来てもらったりして、埃のかぶった8ミリフィルムをもう一度見ることから始めました。

最近の1～2年は、映像の「保存」と「活用」に力を注いでいます。たとえば、ウェブサイト『世田谷クロニクル1936-83』は、デジタル化した映像をより多くの人に観てもらいたいと考えて制作しました。また、そのウェブサイトを活用した、映像を囲む場「せたがやアカカブの会」も定期的に行っています。アーカイブで大切なのは、しっかり集めて保存することですが、並行して利活用のシーンを作っていくことも重要です。なぜなら、映像の資料性は、より多くの鑑賞者から映像にまつわる会話やコメントが寄せられることによって、はじめて高まっていくと考えているからです。



ウェブサイト
『世田谷
クロニクル
1936-83』

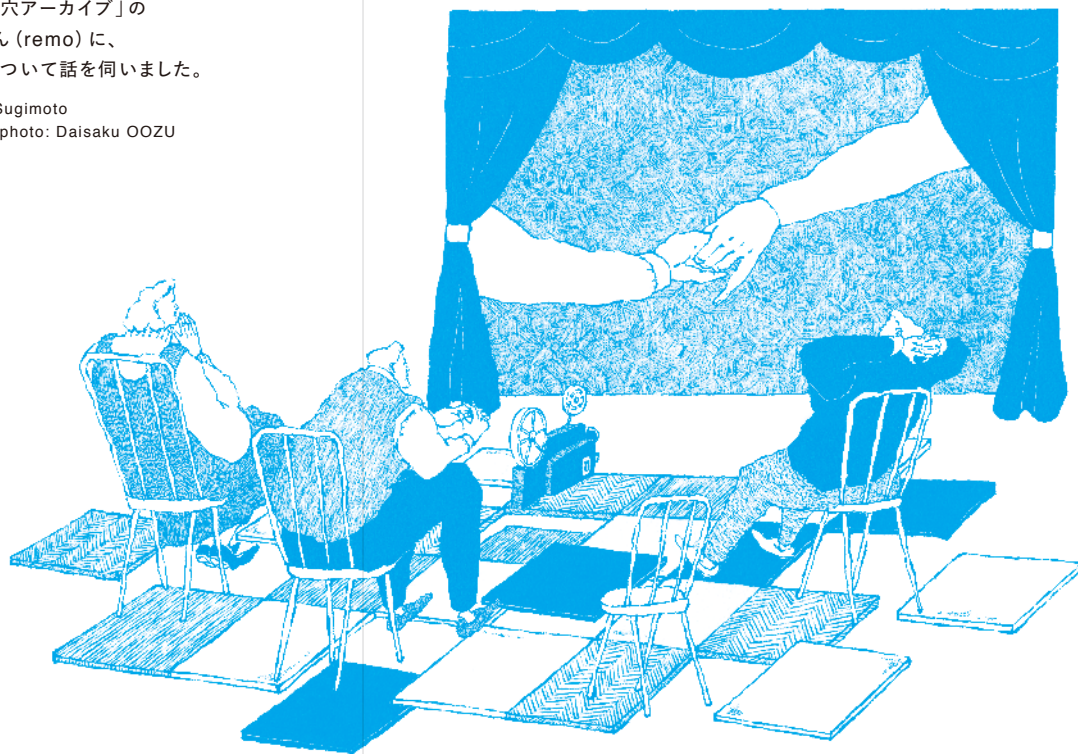
——84巻の映像、映像提供者12人の記憶や個人史を、会場に音声で流した声、そして言葉や私物などを交えて展示した今回の展覧会に関して、松本さんの考えたポイントを教えてください。

会場に《声》がどのように響けばいいのかを考えたことが、展覧会の大きなポイントになりました。当初、映像と提供者の言葉だけでいかに構成できるかを考えていましたが、展示への親しみ易さやこの取り組みの価値がきちんと伝わるかを再検討したときに、提供者の《声》を重要な要素として位置づけ直したのです。

映像や《声》と同様に、提供者の皆さんからお借りしたモノも重要な要素でした。取材を重ねる中で、皆さんは映像には映っていない印象深いエピソードをいくつも語ってくれましたが、そのエピソードに関連したモノは、今も手元に残されていました。そこで、モノも展覧会の起点

松本篤（まつもと あつし）

1981年兵庫県生まれ。NPO法人記録と表現とメディアのための組織（remo）メンバー。市井の人々の記録の価値を探索するアーカイブ・プロジェクト、AHA! [Archive for Human Activities / 人類の営みのためのアーカイブ] 世話人。近年では『はな子のいる風景』（武蔵野市立吉祥寺美術館、2017）の企画・編集を担う。現在、戦時中の子どもたちが書いた「慰問文」のアーカイブが岐阜で進行中。



のひとつと捉え、モノそれ自体が記録媒体であり再生媒体として機能するあり方を模索しました。

最後に、提供者12人の語りを立体的に表現するため、そして、この取り組みのコアである「市井の人々の記録にひそむ価値」を表現するために、年表を用いました。世田谷という地域や昭和という時代、つまり大きな時空間のなかに、12人それぞれの時空間を埋め込むことによって、クロニクルという一般的な歴史記述のあり方を“一時的に脱臼させる”ことを狙いました。

——展覧会は、新型コロナウイルスの影響で会期の短縮を余儀なくされましたが、会期中に印象的だったことや得られたことなどあれば教えてください。

提供者のひとりが会場で勝手にファシリテーションをしていたのは、展覧会の予定調和を崩すことにもなり印象的でした。また、別のご高齢の提供者が、会場で自分の声をじっと聴いていて、「自分の歴史が残せる」と言ってくれたのですが、この展覧会に参加した思いをその時に初めて知りました。

このコロナ禍の時期に再生された12人の語り。そんな《声》たちに出会える場を社会にそっと開き続けていきたいと思っています。数十年後、それらは今とはまったく違う意味で響いているかもしれません。



「記録」というトリガー、 「記憶」という謎

さまざまな視点で「生活」の面白さを伝える雑誌『生活考察』。
その編集発行人の辻本力さんに、
展示会のレビューをご寄稿いただきました。

photo: Daisaku OOZU

人の記憶とは面白いもので、ある体験や、その時感じたことなどが、「なぜそれと？」という意外なもの結び付いていたりする。

例えば、ある駅の構内の階段が、そこはまったく別の場所にあるカレー屋の味を思い出させたりする。あるいは、ある橋の上から見下ろした風景が、その場所に縁もゆかりもない友人の顔を想起させたり。

もちろん、理屈を立てることはできる。前者なら、カレー屋に行こうと思い立った瞬間たまたま目にしていたのが、その階段だったのかもしれない。後者なら、過去にくだんの橋の上で友人のことを考えたことがあって、その経験が場所とその人とを紐付けてしまったのかもしれない。いずれにせよ、客観的に見れば「もっと他に適当な象徴物があるんじゃないか」となるわけだが、本人がそういう風に記憶してしまっている以上、他人が異議を挟めるものでもない。また、明快な説明を求めることも困難だろう。人は恣意的に記憶を書き換えるし、忘れるし、勘違いだってするのだから。ちなみに、前述の二例は筆者の経験談だが、現にその関係性はまだまだ謎のままである。

「世田谷クロニクル1936-83」は、世田谷在住者および同地に何らかの縁のある人々から集めた84巻におよぶ8ミリフィルムをデジタル化・上映すると共に、フィルム提供者12人へのインタビューを敢行、映像をきっかけに想起された彼らの記憶を紹介するという試みだ。

8ミリフィルムカメラには、今のビデオカメラのようにマイクが内蔵されていない。よって、上映される数十年前に撮られた映像群は無音である。代わりに、そこには、今を生きる者たちの回想が音声として重ねられる。展示を見る者は、古色蒼然とした映像をきっかけに、その撮影者ないしは残された家族が、かつての経験を「思い出す」現場に立ち会うことになる。

例外はあるが、多くの場合、映像から最初に引き出される記憶は、比較的そこに映し出された事物に直結している。しかし、それは徐々に飛躍していき、スタート地点からはどんどん遠ざかっていく。

例えば、1948（昭和23）年生まれのアキラさん（71歳）は、フィルムに映るかつてのアメリカの風景から、その撮影者である父親のことを語り始める。父親の影響を受けて、長らく海外営業の職にあったという彼は、水を得た魚のごとくアメリカン・カルチャーについて語り倒した末に、趣味のアマチュア無線を介して知り合ったコードネーム「チャーリー」君（藤沢在住）との思い出話に至る。あるいは、1953（昭和28）年生まれのヨウコさん（67歳）が、建築中の生家を映した1961（昭和36）年の映像を見ながら思い出すのは、近所にあった養鶏場や広大な竹藪のことだ。それから思い出は徐々に時代を下っていき、ついにはボランティアで虫を育てているという、彼女の現在の生活の話へと収斂していく。

また、映像と思い出との間に、ある種のズレが生じているケースもある。

1954（昭和29）年生まれのナギサさん（66歳）が、幼少時代の彼女を映したとおぼしき映像を見ながら思い出すのは、自身の青春時代のエピソードだ。デモに行くこと、反体制的であることが当時のトレンドだったこと、下北沢のなじみのコーヒーショップで友だちとお喋りに明け暮れていたこと——映像も回想も、下北沢が「演劇の街」となる以前の姿を捉えているが、そこには10年以上の時間の開きがある。あるいは、1936（昭和11）年生まれのトシコさん（84歳）のように、映像に映る事物そのものよりも、撮影者である亡き夫に思い出のウェイトが置かれていることも。

12人のオーラル・ヒストリーは、いずれも8ミリフィルムの映像がトリガーになっている。しかし、その回想のプロセスも、映像と記憶の対応の程度も一様ではない。どこまでも私的で、だからこそ法則が曖昧で、つまりは謎が多い。そのミステリアスな有り様こそが「人間」という存在の面白さであり、解明することなど到底不可能そうなのに、どうしても思い巡らすことを止められない理由なのかもしれない。



辻本力（つじもと ちから）

ライター・編集者。1979年生。文化施設「水戸芸術館」を経て、2010年、生活と想像力をめぐる“ある種の”ライフスタイル・マガジン「生活考察」を創刊。文芸・カルチャー・ビジネス系の媒体を中心にいろいろと執筆。近刊に、日記アンソロジー『コロナ禍日記』（タバックス、編著）がある。

旅する84葉、書き残された言葉



84葉の絵葉書 (= ポストムービー) が束ねられた映像目録「世田谷クロニクル」。フィルム提供者の方が絵葉書に書き記した映像にまつわるエピソードや解説を少しだけ紹介します。

No.11 『清ちゃん、白ブタ』

昭和16年 | 旧諸戸家農園 (三重県)
大きく写っている年長の男児、女児は国民学校に入学した年である。この年度より、今までの尋常小学校が国民学校と改められた。その一回生である。



Sei-chan, and white pigs

1941, Old Morotoke farm (Mie Prefecture)

The oldest boy and girl appear large in the film. This was the year that they enrolled in a national school. From this school year, Japan's "ordinary elementary school" was renamed "national school." The children were its first graders.

No.21 『東京見物 親子4人』

昭和35年1月 | 皇居、東京タワー、祖父宅 (代沢)、動物園 (福岡)

新幹線のない時代なので、寝台特急に乗りました。寝台が2段になっていて、私は上の段に寝たい!と主張しましたが、だめでした。落ちるから!



Sightseeing in Tokyo

1960, Tokyo Imperial Palace (Tokyo, Chiyoda), Tokyo tower (Tokyo, Minato), Grandfather's house at Daizawa district (Tokyo, Setagaya), Unknown Zoo (Fukuoka Prefecture)

As these were the days before shinkansen we rode a sleeper express train. There were two-level bunk beds. I asserted that I wanted to sleep on the top bed. It was to no avail. My family said I would fall off!

No.22 『保田臨海学校』

昭和35年7月27日~30日 | 芝浦浅橋、保田 (千葉県)、東京タワー

このころは、Tシャツやトレーナーがなく、親が子ども服を手作りしている。団塊の世代で、6年生は一クラス50人で6クラスまであった。



Summer school at Hota

1960, Shibaura-sambashi ship terminal, Hota beach (Chiba Prefecture), Tokyo tower (Tokyo, Minato)

There were no T-shirts or sweatshirts around this time. Parents made clothing for their children by hand. As we were baby boomers, the sixth grade had six classes with 50 students each.

No.82 『多摩川台風のあと』

昭和56年12月~57年8月 | 自宅兼店舗 (玉川)、山梨県、多摩川など

兵庫島の周りに車が何台か駐車していたのが、心配でした。8mmカメラを構えた娘は、楽しそうだった!!



After typhoon at Tama River

1982, House and shop at Tamagawa district (Tokyo, Setagaya), Yamanashi Prefecture, Tama River, etc.

I was worried about the several cars parked around Hyogojima (island on a river). My daughter with an 8 mm camera in her hand seemed so amused!



キリトリ

時の亀

特別号だけのスペシャル付録は、COCHAEの「世田谷クロニクル」オリジナルオリガミ



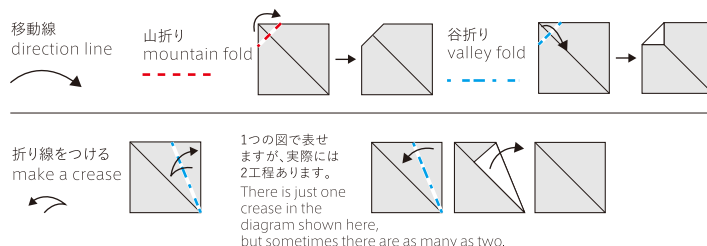
亀は時空を超えて、ゆっくりと進む。

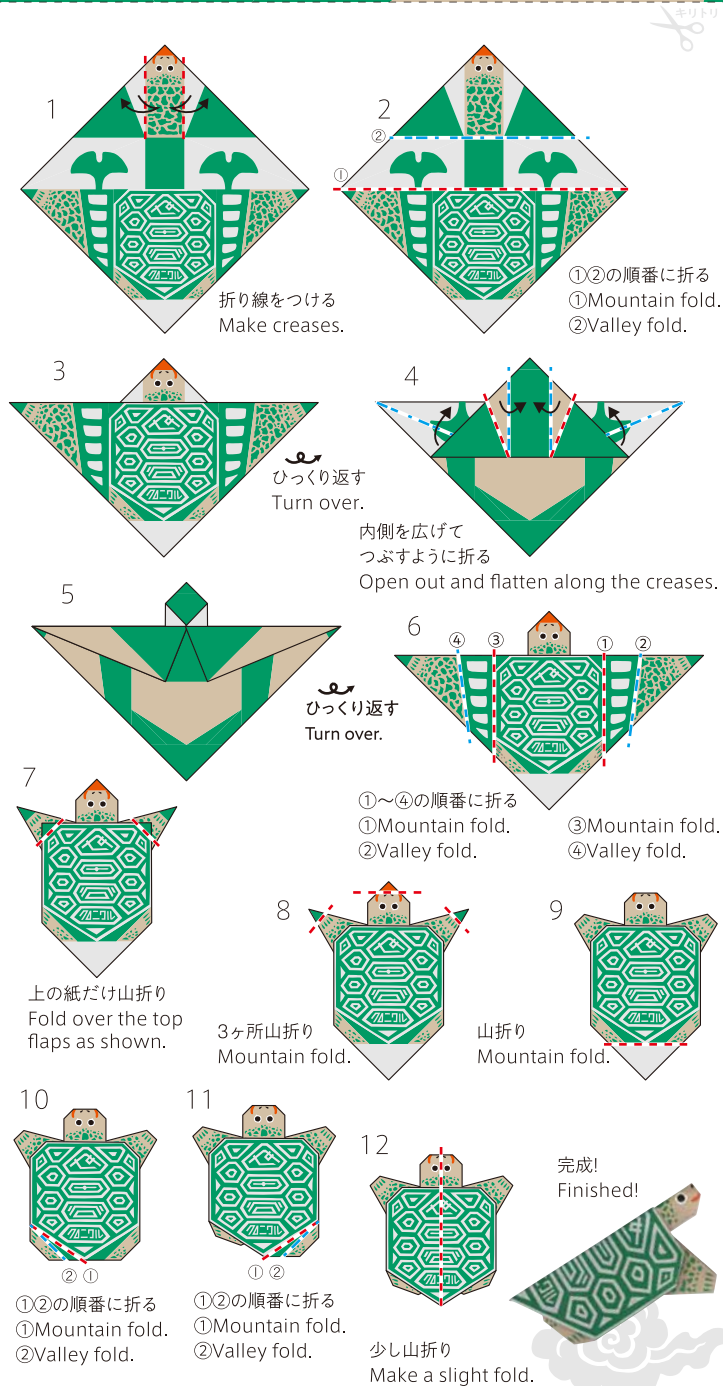
「クロニクル」と聞いて『モモ』(ミハエル・エンデ作) に出てくるカシオペアという亀を思い起こした。カシオペアは少し先の未来を見通せる力があり、甲羅に浮き上がる光る文字で会話ができるモモの案内役。また日本のよく知られた昔話・浦島太郎が乗る亀も時空を移動する象徴として描かれている。亀には時空を超える不思議な力があるのかもしれない。

COCHAE

軸原ヨウスケ、武田美貴による デザイン・ユニット。2003年「折紙をもっとポップに!」をキーワードにグラフィック折紙を制作。現在は新しい視点を持った玩具や雑貨の開発、出版企画、商品企画、展示など 幅広い活動を行っている。 <http://www.cochae.com/>

基本的な折り図記号





次のページから



トークイベント「思い出を食べる」に寄せて

「世田谷クロニクル 1936-83」展は、
多数の関連イベントを予定していましたが、
新型コロナウイルス感染拡大の影響で
そのすべてが中止となりました。

ここからは、
[トーク] 思い出を食べる に登壇予定だった
末崎光裕さん、**佐藤正実**さんの
コラムを紹介します。

イベント詳細

[トーク] 思い出を食べる

3.22 (sun) 13:00 ~ 15:30 会場: セミナールーム A・B
※新型コロナウイルス感染症の影響により、本イベントは中止としました。

あなたの思い出の食べ物は何か。新聞に投稿された戦時中の
女性の声を編み直した『戦争とおはぎとグリンピース』(2016)。
3.11直後の食べ物の記録を市民から集める活動「3月12日はじまりの
ごはん」。それぞれの試みから、食と記憶について考えます。

登壇者: 末崎光裕、佐藤正実、松本篤(本展企画者/remo)
参加費: 1,000円(おはぎとお茶付) / 50名(申込先着)

食卓でしたためられた覚悟

昭和30年代の女性投稿欄から



末崎光裕(すえざき みつひろ)

西日本新聞社出版グループ。1971年福岡県生まれ。雑誌社を経て独立。99年から編集プロダクションを営み、雑誌、書籍の編集・デザインを中心に活動。2011年から現職。『ペコロスの母に会いに行く』(第42回日本漫画家協会賞優秀賞)、『戦争とおはぎとグリンピース』、『雲のうえ 一号から五号』、『大分県のしいたけ料理の本』、『本屋がなくなったら、困るじゃないか』などを手がける。フリーマガジン『SとN』では編集・執筆を担当。

食と記憶

3月12日はじまりのごはん—震災直後の
食べ物の記録を市民から集める活動



佐藤正実(さとう まさみ)

3.11オモイデアーカイブ代表。3.11オモイデアーカイブとは、「人々の想い出」を媒介として、まちの文化や営みを知る・伝える企画を運営する市民団体。津波で被災した仙台市沿岸を巡り交流を図る「3.11オモイデツアー」、震災前と今を定点撮影する「3.11定点撮影プロジェクト」などに取り組んでいる。2014年から食べ物を通して震災体験を語り合う「3月12日はじまりのごはん」をせんだいメディアテークと共催。「Library of the Year 2018」優秀賞。

食卓でしたためられた覚悟

昭和30年代の女性投稿欄から

末崎光裕

昭和35(1960)年4月12日。福岡を拠点とする西日本新聞に、「おはぎ」という題の投稿が掲載された。年齢は書かれていない。福岡市に住む主婦で、北村さんという女性が書いたものだ。

息子さんが召集され、明日出発するという日に、貴重品の砂糖と小豆をなんとか手に入れてこしらえた好物のおはぎ。「うまい、うまい」を連発した彼は、その後の戦争激化で南方に送られ、音信が絶えてしまった。終戦を迎え北村さんは、帰国船が着くたびにおはぎを抱えて港に迎えに行くのだが、いくら待っても船に彼の姿はない。消息を知るとい人が見つかり広島まで訪ねると、特攻に志願し、散ったのだという。その人は言った。「日本を脱つことになった日、Kくんの好きなおはぎが出たんですが、さすがにあの時はのどを通らないようでした」と。

「婦人の日」の明るい経験や意見、主張や真実の声をほしい」と昭和29(1954)年に開設されたのが、女性だけの投稿欄「紅血」である。昭和29年は、高度経済成長期の幕開けともいわれた年。映画「ローマの休日」や「ゴジラ」などが公開され、電気冷蔵庫・洗濯機・掃除機が「三種の神器」と呼ばれ始めていた。社会はにぎやかになり、街は大きく豊かになったのだと、昭和40(1965)年代生まれの私は聞いているし、繰り返し映像で見てきた。果たして実際の生活はどうだったのか、と疑問が膨らんだのは2015年のことだ。戦後70年の節目を迎え、テレビや新聞では安全保障の議論や、いまだ戦闘が続いている地域の惨状が繰り返し報じられていた。国際問題としてではなく、評論家の言葉ではなく、語り部の方々の声ともちょっと

違う、「ただの人」の声を聞きたいと思ったのだ。ちょうどその頃、児童文学作家の村中李衣さんと出会った。彼女は全国を講演で回る際、参加者に「昭和20(1945)年の8月15日、あなたはどこで何をしていましたか」と尋ね、メモを取っていたのである。田舎に行くほど8月15日の境は曖昧で、「それどころじゃなかった。その日家族が何を食われるか、生きるために必死だった」という声が続く。残っている。

福岡で編集プロダクションを営んでいた私は、西日本新聞社出版部と仕事をする中で、貴重な生活史である新聞アーカイブを活用できないかと当時の部長と企画を立てていた。縁あって入社しデータベースを閲覧する権利を得た私は、「大きな出来事」の陰に隠れている小さな声に興味を惹かれていた。2015年、私たちは「戦争」をテーマに投稿を掘ってみようと思き出したのだった。

開設以来ほぼ毎日掲載されている投稿欄「紅血」。まずは、マイクロフィルムをスキャンしたデータベースから、欄を見つけ出すこと、そして1本1本“拾い上げる”ようにプリントアウトした(新人女性部員の努力による)。初期の10年分、合計3000本強の投稿から戦争・戦後に触れたものをピックアップすると、約300本が残った。その中で最も心を奪われたのが、冒頭の「おはぎ」という投稿だった。

戦争が遠い世界の事のように感じていたという部員は、このように記している。

「紅血に寄せられた声は、私の目の前に迫ってきたのです。配給された古い鍋に残る母の思い出、貧しい暮らしの中で見つけたささやかな喜び…。描かれていたのは、当たり前な日常を送るという幸せを諦めず、理不尽な現実に向き合う女性の姿。驚いたことに、当時は10代、20代の投稿者も多く、その等身大の言葉は、時代を隔てて生きる同世代の私の胸を打ちま

食と記憶

3月12日はじまりのごはん——震災直後の
食べ物の記録を市民から集める活動

佐藤正実

「3月12日はじまりのごはん——いつ、どこで、なに食べた?」は、東日本大震災を「食」から考えてみようという試みで、せんだいメディアテーク「3がつ11にちをわすれないためにセンター」との協働で、2014年からスタートしました。具体的には、震災後に市民から提供していただいた震災写真の中から「食べ物」に関する写真を72枚セレクトし、来場者ご自身により【3.11後、初めて食べたものは?それはいつどこで?】を思い出してもらい、付せん紙に書き出す、という市民参加型のイベントです。



2011年3月12日 震災翌日の朝食(提供/佐藤寛法さん)

私たちは2012年5月から「3.11 定点観測写真アーカイブ 公開サロン」を開催しており、そこでのやりとりがきっかけで、この「3月12日はじまりのごはん」は生まれました。

第9回目(2013年6月1日)の公開サロンにおいて、参加者に「震災の翌日は何を食べましたか?」という問いかけをしたところ、「インスタントラーメンを50食ほど備蓄していたし、キャンプ用品があったのでしばらくは大丈夫だった」、「レトルト食品を備蓄していたが水がなかったので苦労した」、「各家々にあった野菜を町内会長宅に持ち寄り温かいスープを食べてほっとした」、「石油ストーブが使えたので冷蔵庫にあった野菜を煮て食べた」、「カロリーメイトを少しずつ食べて過ごした」などが、次々と語られ始めたのです。

これらの話。例えば、保存食の話からは、災害時に家庭や学校、職場で準備しておいたものは何なのかが分かり、炊き出しの話からは、町内会や商店街の災害時の連携やコミュニティまでも推測することができます。また非常時に役に立ったもの・立たなかったものも見えてきます。

たった1枚の写真から、何十というそれぞれの人の実体験を引き出し、さらに、食べ物に付随して現れる様々な記憶から、当時の生活全般の様子をうかがい知ることができる。「食」により様々な記憶が誘発され、いままですら遠慮し話せなかったことも「食」により語ることができる、と気付かされました。

写真から想起された自身の体験を付せん紙に書きこみアウトプットする。そして、「食」を通じて個々の小さな出来事を拾い集める。それが「3月12日はじまりのごはん」の発想です。あの大震災を「自分事」として再生してもらうためには、と問い続けていた私たちの、ひとつの答えとなりました。

展覧会『世田谷クロニクル』は、昭和の世田谷を映した84巻の8ミリフィルム（記録）と12人のフィルム提供者の語り（記憶）を手がかりに、私たちの“現在地”を照らす試みです。ウェブサイト（<https://ana-chro.setagaya-ldc.net>）で公開中の映像を網羅的に紹介するとともに、オーラルヒストリーや関係する私蔵品、個人と社会の歩みが交わる年表を展示しました。

映像がトリガーとなって生まれる声に耳を傾け、また自分自身でも書き残し、誰かと共有すること。「アーカイブ」という静的な収蔵庫を開き、誰かの記録を自分のために活用する手引きを示すことが、本展の目的でした。

その実演として展示と相補的な関係にあるイベントを多数予定していましたが、残念ながら全て中止となってしまいました。その一端は本冊子で紹介した通りです。生活の足もとを照らすアーカイブを、これから一緒に楽しんでいただければ幸いです。

Exhibition “Setagaya Chronicle” attempts to cast light on our present place, drawing clues from 84 reels of 8 mm films showing Setagaya in the Showa period (record) and the stories of 12 people who provided films (memory). The films available on the website were introduced comprehensively, together with oral histories, relevant personal memorabilia, and a timeline chronicling individual and societal events.

The films will trigger memories and reactions. Listen to them, write them down, and share them with others. The purpose of this exhibition was to unearth a static archive and provide guidance for drawing on other people's records for viewers to make their own discoveries.

Although a number of events complementing the exhibition were planned for this purpose, regrettably they have all been cancelled. Some of them are presented in this issue. We hope we can together continue to enjoy the archive that shines a light on the matters of life.

季刊生活とは

もし、みえない誰かの生活と、ここで偶然出合ったら、
そこから、何が読めるでしょうか？

何もないようで、いつも何かが起きている。

季刊生活はあなたと誰かの日常を、
行ったり来たりする回覧板です。

If you happen to encounter the unseen life of another,
what, then, would you discover?

It may feel like nothing,
but something is always happening.

Seikatsu Quarterly is like a bulletin board,
traveling back and forth between your daily lives.

季刊生活 特別号

発行日：2020年7月21日
編集：生活工房 石山那緒子
編集協力：杉本勝彦
デザイン・編集協力：牧次郎
翻訳：株式会社インターブックス（P.9-10は除く）
印刷：株式会社八紘美術
発行：公益財団法人せたがや文化財団 生活工房

Quarterly: SEIKATSU Special

Issue date: July 21, 2020
Editor: Lifestyle Design Center Naoko Ishiyama
Editing Cooperation: Katsuhiko Sugimoto
Design, Editing Cooperation: Juijiro Maki
Translation: Interbooks Co., Ltd.
Printing: Hakkou Bijyutsu Co., Ltd.
Issued by Lifestyle Design Center, Setagaya Arts Foundation

した。そこには同性としてあこがれるおおらかさや強さもありました。私は彼女たちについて、もっと知りたいと思うようになりました」

厳選した42本の投稿を綴じたのが、『婦人の新聞投稿欄「紅血」集 戦争とおはぎとグリーンピース』という本だ。本のオビに私たちは、最も大きな字でこう書いた。

どんなときも 絶望しない——。

「一家にとって生命の糧であったじゃがいもの恵みを永久に忘れないために。あの苦しみと悲しみが、二度とこの世に起こらないよう、毎年私はじゃがいもを植える」（昭和34年）。「死ぬ前にいま一度、ヨウカンをおなかいっぱい食べたい」とつぶやいた母（昭和31年）。配給されたなべを生涯手放さず、産湯を沸かし、イモを煮て「母が女の人生をともにしたこの鍋」を、決して捨てないと決めた私（昭和37年）。

投稿を一つ一つ拾い上げ、「ただの女性たち」がペンを握りしめている情景を思い浮かべながら、考えた。ささやかな声こそ、人々の確かな声として、聞き過ごしてはならないのではないかと。

食べること、食べさせることは、希望を持つということ、明日も生きぬくということ。わずか600字の中に、彼女たちの覚悟が込められている。

本来のアーカイブの主旨からすれば、撮った本人からのヒアリング情報をもとに記録化することが最も効率がよく、極端な言い方をすれば、“キャプションを一本化していく作業”を通し、その写真が何を物語るのかを探っていくします。

しかし、「3月12日はじまりのごはん」は、キャプションを絞り込むのではなく、逆に複数化する作業をめざしました。撮影者の意図により、目の前に広がる空間の中から一部分を切り取られるのが写真ですが、そこに敢えて、複数の人の体験や記憶を拾い集め、重ね加えていくことで、汎用性を持たせるという試みです。

東日本大震災の中での「生活」にスポットを当てたことで、市民視点にはどう映ったのか。そして展示写真と来場者の経験がどのようにリンクしていくのか——。展示している72枚を、順を追って見ていくことで、ゆっくりと記憶を想起させてもらおう、というのが最も重要なポイントです。

その意味で言えば、「3月12日はじまりのごはん」は、大手メディアが伝えた地震被災の大きさと対極にある、震災の中における市民の生活ぶりを伝えるツール、あるいは生活を知るリサーチャーとなっていくのかもしれない。

生活工房のご案内

※開館状況など詳細は
ホームページでご確認ください。

生活工房は

世田谷区が設置したユニークな文化施設です。

デザイン、文化、環境などをテーマに、
展示やイベントを開催しています。

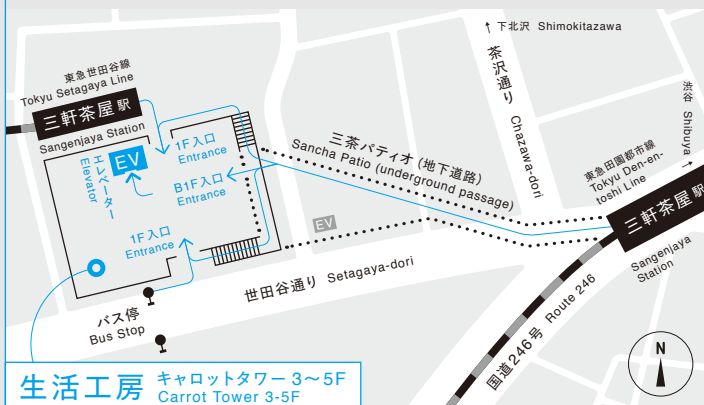
また、コミュニティ・キッチンをはじめ、
展示、ワークショップ、セミナー、ミーティングなどに
利用できる部屋の貸出を行っています。

The Lifestyle Design Center is

a unique cultural facility established by Setagaya city.

Exhibits and events are held on themes of design, culture, environment, etc.

We have a community kitchen and rooms for exhibits, workshops,
seminars, and meetings available to rent.



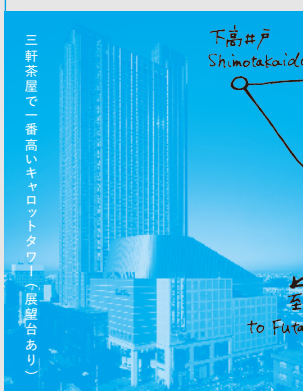
生活工房 キャロットタワー 3～5F
Carrot Tower 3-5F

アクセス

- 東急田園都市線「三軒茶屋」駅 三茶パティオ口 徒歩5分
地下通路より1F入口またはB1F入口（東急ストア入口の右隣）に
入り、キャロットタワー内のエレベーターをご利用ください。
- 東急世田谷線「三軒茶屋」駅直結
- 東急・小田急バス「三軒茶屋」停留所そば

Access

- Tokyu Den-en-toshi Line: 5-minute walk from the Sancha Patio exit at Sangenjaya Station
Subway passage: 1F or B1F entrance, take the elevator inside Carrot Tower
- Tokyu Setagaya Line: Directly connected to the Sangenjaya Station
- Tokyu Bus, Odakyu Bus: Located near the Sangenjaya Station stop



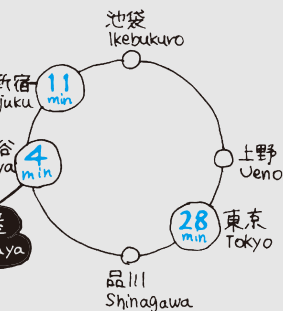
下高井戸
Shimotakaido

新宿
Shinjuku

渋谷
Shibuya

三軒茶屋
Sangenjaya

至 二子玉川
to Futakotamagawa



※掲載の所要時間は目安です。
乗り換え・待ち時間等は含まれません。

お問い合わせ

(公財) せたがや文化財団
世田谷文化生活情報センター

生活工房

〒154-0004 東京都世田谷区太子堂4-1-1 キャロットタワー
Tel. 03-5432-1543 Fax. 03-5432-1559
Mail. info@setagaya-ldc.net

Contact

Lifestyle Design Center

Setagaya Arts Center
Setagaya Arts Foundation

Carrot Tower, 4-1-1 Taishido,
Setagaya-ku, Tokyo, 154-0004

<https://www.setagaya-ldc.net>

